

正倉院の点本調査をめぐる

遠藤嘉基

一

一般には公開されない聖語蔵の点本資料について、訓点語研究のグループが、秋の曝涼時に拝観調査を許可されたのは、

A 昭和二六年一〇月一七日～二〇日

昭和二七年一〇月二五日～三〇日

昭和二八年一月一日～一四日

B 昭和五二年一〇月二四日～二九日

昭和五四年一〇月一五日～二〇日

であるが、期間が限られていることや、天候がわるく湿度が規定から外れるような場合には、調査中止になるため、一定期間内で調査を完了す

ることはむずかしく、そういうことも響いてか、今まで発表されたものについての再検討、という方向で調査されたものが多い。しかし、その結果をみると、今日まで気づかれていなかったことや、訂正を要するもの、あるいは新しい見解などが生み出されている。したがって、それらについて発表することは、今まで知られていない資料についての調査結果を発表することともに、学界のためには価値ある、重要なことと考える。その意味では、この度の「正倉院年報」(第七号)での、築島裕・小林芳規両氏の発表は、意義あるものの一つといえよう。

二

ところで、標題の「点本」ということばだが、これは経文とか漢籍な

どの、いわゆる漢文で書かれた資料に、仮名文字やヲト点・返り点・声点などの符号を、胡粉・朱・墨あるいは角筆などで示すことによって、本文の訓読を示したもので、いわゆる訓点本のことである。

では、前掲の昭和二六年以前に、聖語蔵の点本調査の行なわれたものはなかったか、というと、すでに鈴木一男氏の「初期点本論攷」（昭和五四年刊・桜楓社）の中の「聖語蔵経巻調査畧史」にあるように、大正五

年秋から一二年八月へかけての、「地藏十輪経元慶点」「成実論天長点」

「願経四分律古点」を中心とする、大矢透博士のが最初のものである。もっとも、大矢博士の手がけられたものの中には、未整理の資料が外にもあったようで、それらについての調査研究を、博士の依頼を受けて進められたのが、昭和六年から一四年へかけての、春日政治博士の、「成実論天長点」「金光明最勝王経註釈古点」「中観論古点」「央掘魔羅経古点」「阿毗達磨雜集論古点」「金剛般若経讀述嘉祥点」「菩薩善戒経古点」などを中心とするものだったようで、まさに大矢透・春日政治両博士の業績は、聖語蔵点本調査の先達といえようか。ただし、両博士の業績のうえには違いがあった。大矢博士のが「仮名字体の研究」に焦点があったのに対し、春日博士のには、点本資料の解読から、それを通しての国語研究への展開があり、そこに今日の訓点語学成立の基礎がうかがえるからである。その意味では、正倉院の点本調査は、今日の国語学発展のうえに、大きな役割をはたしている、といえようか。（ここで一言触れておきたいことがある。それは、春日博士の業績の支えとなっているも

のに、実は恩師吉沢博士のご指導があったことである。もっとも、正倉院の資料調査には関係がなかったようだが、訓点語の研究については、あちこちの寺院の点本を調査され、国語学の立場からの、訓点語研究への教導があった。その吉沢博士の最初の教え子が、春日博士だったのである。とすると、春日博士は、聖語蔵の点本調査を通して、師の教えを具体化された最初の方、ということにならうか。

三

さて、以下では、わたくしどもがお世話になった、(a)昭和二六、二七、二八年度、および(b)昭和五二、五三年度のことに、そのあらましを述べることにしよう。

まず(a)昭和二六、二七、二八年度の調査について。この三年間にわたっての調査が許可されたことの経過については、今はっきりとしたメモが無いので、何とも申しかねるけれども、ひとえにこれは、当時の和田軍一所長の、格別のご配慮によるものであったように記憶している。調査期間は、一の項で示した通りだが、参加メンバーは、二六年度が中田祝夫・鈴木一男・廣浜文雄・築島裕と遠藤の五人。そして拝観調査の場所は、今と異なって、構内の「持仏堂」であった。二七、二八年度になると、春日政治・春日和男の二人が、メンバーとして新たに加わるが、その二八年の調査期間中に、以上のメンバーの談合によって、翌二九年

六月に「訓点語学会」が発足し、五二年以降の聖語蔵の点本調査には、その中心メンバーが参加することとなる。そして、学会の発足とともに、機関誌として「訓点語と訓点資料」が刊行され今日に至っているが、その第一、二輯に掲載されたのが、この二六、二七、二八年度の聖語蔵点本についての調査報告だったのである。参考のために、次にあげると、

(第一輯)

「正倉院聖語蔵 東大寺図書館蔵 地蔵十輪経元慶元年加点本に見えたる字音資料」(中田祝夫)

「聖語蔵辨中辺論天曆点」(築島裕)

「聖語蔵経巻調査報告」(廣浜文雄)

*これは「大乘阿毗達磨雜集論」巻十一・十五についてである。(遠藤注)

(第二輯)

「聖語蔵御本四未曾有経試読」(春日和男)

「大乘阿毗達磨雜集論」調査報告(鈴木一男)

*これは、巻十二・十四についてである。(遠藤注)

ここで、一言つけ加えておくと、実は聖語蔵点本の調査にあたっては、その結果を世間に発表することは、原則として避ける、というのが、拝観調査にあたっての申し合わせ事項の一つだったのである。したがって、上記のように、学会誌に発表させていただいたのは、特殊なケースであって、これも和田所長の特別な配慮によるものであることを付け加えておく。次に、この機会にもう一つ付け加えておきたいのは、鈴木一

男氏による「成実論天長点」七巻の、移点本作製の件である。これは、二六年から二八年へかけての、点本拝観調査を機に、筆者遠藤のもとで計画され、当局の了解をも得ていたものであるが、これを実現するには、大矢・春日両博士の場合と同じく、筆者が奈良に定住しなかり、とてもこの仕事に専念することはむずかしい、と判断した結果、鈴木氏にお願いをし、当局の方々のお力添えで、二七年から約一〇年にわたって、この仕事にうち込んでいただき、完成を見たが、これも聖語蔵点本調査の機会を与えていただいたことにまつわる、おかげの一つといえよう。

四

それから暫くの間、調査の機会がなかったが、昭和五二年には一〇月二四日から、また五四年には一〇月一五日から、それぞれ一週間にわたって、それぞれその時の後藤四郎所長および武部敏夫所長のご配慮によって、聖語蔵経巻の拝観調査の機を得ることとなった。調査は、申請が許可されてから、正倉院当局の指示に従って実施されることになるが、調査室は二六年当時と違って、今は「修理室」で所員二名の方の立合いの下に、作業が行なわれることになっている。そして、調査作業が終了すると、それぞれの調査結果を遠藤のもとでまとめ、正倉院事務所へ提出することになるが、これは、昭和二六年のころには無かったことである。そこで参考のために、調査対象の資料名と担当者名とを、年度別に

以下列記しておく。(未提出のものもある)。

昭和五二年度

○「大智度論 卷一・三」「成実論卷十四」(大坪併治)

○「金光明最勝王經註釈・卷八」(春日和男)

○「華嚴經探玄記 卷九・十九」「唐經深密解脫經 卷一・二・三・四

・五」「大智度論 卷四」(小林芳規)

○「大智度論 卷一・二・三・四」「深密解脫經 卷一・二・三・四・

五」「成実論 卷十四」(築島裕)

○「唐經地藏十輪經 卷一〜五合卷一軸」(中田祝夫)

○「華嚴經探玄記 卷九・十四・十九」(遠藤嘉基)

昭和五四年度

○「説無垢稱經 卷二」(春日和男)

○「大乘阿毗達磨雜集論 卷一・十一・十二・十四・十五」「辨中辺論

卷三」(小林芳規)

○「大智度論 卷一・二・三・四」「央掘魔羅經 卷一・二・三・四」

「大乘阿毗達磨雜集論 卷一・十一・十二・十四・十五」「成実論 卷

十一」(築島裕)

○「地藏十輪經正曆三年点 卷一〜五合卷一軸」(中田祝夫)

○「華嚴經探玄記 卷九・十・十四・十九」(遠藤嘉基)

これらの内容は、それぞれに評価の高いものだが、それらの中から、

このたびは、一の項で触れたように、築島・小林両氏のを、「正倉院年

報」(第七号)に掲載させていただくこととした。

(京都大学名誉教授)